HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	地名真駒内の由来　アイヌ語makの意味
著者	切替，英雄；KIRIKAE，Hideo
引用	北海学園大学学園論集(153)：243-248
発行日	2012-09-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

地名真駒内の由来

アイヌ語 mak の意味

切　替　英　雄

図１　真駒内川*1

札幌を流れる石狩川水系豊平川の支流，真駒内川は美しい川だ。

この川の名（マコマナイ）は，松浦武四郎の日誌*2 に現れる（75 頁）。噴火湾沿岸アブタ（虻田）を出て，現在の中山峠を越え，サツホロ（豊平川）に降り，石狩川本流に至る条である。この区間の案内人は，アブタのアイヌ 4 名，ウス（有珠）のアイヌ 2 名であるから（39 頁），そのいずれかの口から出たものを武四郎の耳が捉えたアイヌ語の川の名であるに違いない。

アイヌ語地名研究は，いうまでもなくアイヌ語地名を研究対象とする。しかし，当のアイヌ語地名をアイヌの誰が言って，誰がそれを聞いて地図などの文書に記載・登録したのか，その経緯が不明な場合が多く，そのため，学として根本的な危うさがある。それはともかく，この名の由来（地名の意味）について誤った説が流布していると思われるので私の考えを述べる。

たとえばインターネットのあるサイトでは，マコマナイが

山の奥から流れてくる川

*1　札幌市南区真駒内柏丘 10 丁目，図 5 ①より。白い建物は柏丘 8 丁目。奥に見えるのは藻岩山。
*2　秋葉実解読『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』上，北海道出版企画センター

と説明されている。*3 このような説は，山田秀三のいわゆる受け売りで，もと山田秀三が『札幌のアイヌ地名を尋ねて』(楡書房，昭和 40 年) で立てたものだ (pp.128-9)。豊平川の支流はどれも短いが，真駒内川だけは「特別に」長い。「無闇に奥深い山から流れている川」とも地図をご覧になった印象をしるされている。そこで，永田方正が『北海道蝦夷語地名解』(明治 23 年) で示した

マㇰ　オマ　ナイ　後背を流る川

という地名の意味を

マㇰ・オマ・ナイ　山の方・にある*4・川*5

と解釈された。これは，知里真志保が『アイヌ語入門』『地名アイヌ語小辞典』(いずれも昭和 34 年刊) などで，また，生前，山田にたびたび口頭で，sa「前」「浜の方」に対して mak は「後」「山の方」である，と述べたことに従ったためでもある。

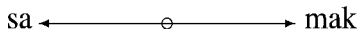

図 2　沿岸部での mak (知里の説)

さて，知里の述べたこと (図 2) は，海に臨む一帯ではおそらく当たっていたのだろう。先頃翻訳した金成マツが伝承し，みずから英字でしるしたシノッチャ風の叙事詩に次のような詩句がみられた。*6

He**mak**ashi wa	炉の後ろへ (炉の mak へ)
ku-shikiru ko	振り向くと
ku-ebituntunke	くすくす，くっくと
ku-ebikitkitche.	忍び笑いをした。
He**sa**shi wa	炉に向いて (炉の sa に向いて)
ku-shikiru ko	直り
rai kum be tashmak	おかしさにもう死にそうにあえいで

*3「真駒内」をキーワードとして検索した。

*4 オマは「〜が〜に存在する」という意味の，存在するものを主語に，存在する場所を目的語とする存在を表す他動詞で，ここではその主語にあたるものナイ「川」を修飾している。

*5 アイヌ語には，日本語の「川」に相当する二つの語があるといわれる。ベツ pet とナイ nay。しかし同義ではない。ベツは川の水の流れを指し，水の流れが開析し刻んだ大地の筋，つまり谷・沢をナイという。

*6 切替英雄訳「金成マツ筆録アイヌ英雄叙事詩シノッチャみだらごとにふける女の歌」アイヌ民俗文化財・ユーカラシリーズ 41．北海道教育委員会．平成 24 年 3 月．pp.15-16．シノッチャとは節のついた即興の語り物。分綴，改行，ピリオド，朱字，大文字・小文字の区別および日本語訳は切替のもの。

rai kum be hese　　いまわの吐息を
ku-ki kane　　漏らした。

炉の前に座る女が忍び笑いをする情景だ。アイヌは炉を海に喩えるから，炉に対して座り，前をsaといい（he-sa-(a)shi「浜手へ」），後ろをmakといったことが（he-mak-ashi「山手へ」）この叙事詩から知られる。

しかし，内陸部では，知里説に従うことは誤りであって，そこではmakの反対方向はsaではなくra［ɾa］である（図3）。

川petに向かって前方，つまり川岸方向がraで，*7背の方向がmakとなる（図4）。川に対して垂直な二つの方向がraとmakだが，このほかに，川に沿っての，つまり川に対して平行の方向というものが考えられる。それには川上向きと川下向きの二つがあって，それぞれpéna（川上）とpánaないしsa（川下）で示される。

pis［piʃ］「浜」とkim「山」も方位語彙に含まれるが，ほかの語とは異なり，河川の存在を前提とするものではない。ほかの語は，方向指示のために河川を基準線としている。また，この語彙体系はsaの反義語を欠いている。

makは，よほど広大な平野の中を流れる川でない限り，すぐに標高が高まり，たいてい山になる。たとえば豊平川左岸*8では藻岩，円山，三角山，また手稲山などとなる。kimは上流の山だから，たとえば豊平川では定山渓の山々がそれにあたる。したがって，日本語に訳すとmakもkimも同じく「山手」になってしまう場合が多い。しかし，今やmakとkimの違いははっきりしている。ただこの違いは，私がアイヌ語十勝方言の分析を進めているときに気づくまでは研究者に知られていなかった。図4「アイヌ語の方位」で示した方位名称の体系は，私のアイヌ語の師

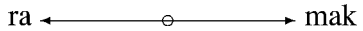

図3　内陸部でのmak

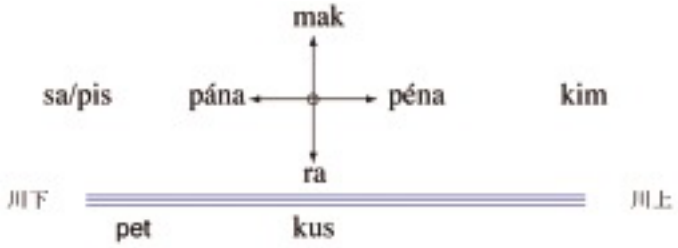

図4　アイヌ語の方位

*7　ただし，川向こうまで行くとraではなくkus［kuʃ］となる。
*8　左岸・右岸は川下に向かっていう。

図 5　豊平川と真駒内川*9

のお一人であられた十勝本別のアイヌ，沢井トメノ（1906-2006）の言語を調べているうちに明らかになった（1970 年代）。沢井トメノはおそらく十勝地方のアイヌ語の最後の話し手だった。

mak に対応する概念が日本語にないのも mak の正しい意味の発見が遅れた原因だと思う。知里真志保や山田秀三，特に知里は mak と kim の違いを自覚しないままに mak を「うしろ」「山手」「奥」「山の方」などと訳している。永田方正が明治 23 年の地名解で示した「後背」という訳語が実は一番的確だが，お二人には永田の伝えたかった「後背」の意味が察せられなかった。

定山渓の山々の間を東へと流れる豊平川を下るとき，定山渓温泉の下流からその左岸（北側。砥石山・硬石山側）は歩くことができない。しばしば険しい断崖が川岸に迫っているからだ（図 5）。だからアイヌは右岸（南側）を歩いたに違いないが，やがて定山渓の谷を抜け出ると，川はすぐに真駒内の柏丘にぶつかり，向きを北へ変える。すると今度は右岸が歩けなくなる。柏丘の断崖が迫っているからだ（図 6）。そのため，さらに川を下っていくためには一旦柏丘の鞍部（石

*9　朱の線は標高 200 m の等高線。柏丘とその南方の丘を囲む黒線は標高 100 m の等高線。右岸，川沿いの点線は推定されるアイヌの道。二つの赤い矢尻①②は，それぞれ図 1，図 6 の写真撮影の地点およびカメラの向きを示す。国土地理院 5 万分 1 地形図「札幌」（NK-54-14-10 昭和 62 年修正）と「石山」（NK-54-14-11 平成 3 年修正）を資料として作図した。

図 6　柏丘にぶつかる豊平川*11

山陸橋のあたり）を乗り越えてこの難所を回避する必要がある。確かに豊平川を徒渉する手もあった。武四郎は戊午（安政五年）2 月 19 日（陽暦 1858 年 3 月中旬）現在の藻南（もなみ）橋②付近で徒渉している。*10 しかし，このあたりは水量が多くかつ流れが急だ。渇水期ないし結氷期でなければ渡るのは厄介だ。武四郎が渡ったのは，まだザイ（川の氷）が川面を覆っていて動かない時期だったと思われる。写真（図 6）の豊平川は藻南（もなみ）橋②から撮ったものであるが，水道水を得るため上流で取水され，それを札幌市民がざぶざぶ使っているため，かつての豊かな水量を示すものではない。現在「おいらん淵」と呼ばれ，当てにはならないけれど，明治時代おいらんがここに入水したという話があるが，その面影もない。

柏丘の鞍部を越えると遠く南方の空沼岳山腹の万計（ばんけい）沼を源とする真駒内川が流れている。この川は柏丘の背後を巡って今の真駒内公園の北端で豊平川に合流しているから，これを下って行くと，再び豊平川の流れに沿うことができる。

豊平川は真駒内川と合流するあたりからその直列的な流れが混沌となり，複雑に分流し，広大な扇状地*12 を形成し，伏流水をうみ，辺縁において美しい湧き水を出現させる（北大植物園の池

*10 秋葉『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』上，75 頁。
*11 藻南橋②より。奥に見えるのは藻岩山
*12 完新世に形成されたいわゆる札幌面。大丸裕武「完新世における豊平川扇状地とその下流氾濫原の形成過程」地理学評論．62 A．589-603．

など)。すなわち「乾いたり・大きくなったりする」川（サツ・ポロ sat-poro）となる。*13 北海道の首府はその扇状地の上に建設された。

豊平川は，中山峠を越えて虻田・有珠に抜ける往時の重要なルート（石狩川流域・日本海沿岸と太平洋沿岸を結ぶルート）だったが，それを上り下りするアイヌは，真駒内川が豊平川の mak にある川と認識していた。

柏丘の鞍部を越えるルートは今日でも重要な交通路だ。先に触れた石山陸橋*14 はここにある。またその下は，かつての定山渓鉄道線（1918-1969）の跡を，今では定山渓・中山峠へ向かう車が通ってる。

「真駒内」の意味だけが，つまり豊平川をたどった往昔のアイヌの地理的認識だけがアイヌ語の衰退とともに忘れられたのである。

*13 今の豊平川は河川改修を施され，扇状地においてもただ一本の流れにまとめられている。

*14 空沼岳・支笏湖へ向かう道に続く。